保育内容「言葉」
教材の研究と指導法

上村　加奈　編著

2018 年

広島文教女子大学

はじめに

このたび、幼稚園教育要領・保育所保育指針・認定こども園教育・保育要領が改訂された。本改訂の要点として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたこと、カリキュラムマネジメントが極めて重要であるとされたことが挙げられる。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたのは、幼稚園や保育所の保育者と小学校の教員が、５歳児修了時の姿を共有化することにより、幼児教育と小学校教育との接続の一層の強化を期待するものである。カリキュラムマネジメントの重要性が示されたのは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見据えた保育の質向上が期待されているからである。これは、組織としての取り組みだけでなく、保育者としての専門性や力量が求められているということにほかならない。

言葉の力を培う環境として、現在の状況に目を向けると、大人社会では機器を介してコミュニケーションを図ることが増えている。これらの現状に鑑みて、幼稚園や保育所において、言葉の面白さ、言葉を遣ったコミュニケーションの楽しさが経験できるような環境づくりが求められている。児童文化財などを用いて、言葉の力を培う保育を行なう必要がある。

本テキストは、保育者養成課程で学ぶ学生の皆さんの学びの一助になればと思い作成した。

数多くの写真を掲載して実際の様相が分かるようにしている。これらの資料は、本学学生と、保育者として働いている卒業生の多大な協力のもとに寄せられた資料である。子どもの実態を把握して、子どもの育ちを期待して思いを込めて制作された数々の作品である。後輩の学修のために協力して下さった卒業生の皆さんに、感謝の意を表したい。

平成 30 年 2 月

上村　加奈

目　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

１．保育内容「言葉」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（1）領域「言葉」がめざすもの
（2）他の領域と関連させた総合的な指導

２．保育内容「言葉」の指導法・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
（1）生活場面での総合的な指導
（2）遊び場面での総合的な指導
（3）児童文化財

３．教材の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
（1）教材研究カードの作成
（2）教材の工夫

４．教材の開発・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
（1）絵本をつくろう
（2）人形劇をつくろう

５．指導法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
（1）絵本の読み聞かせ
（2）紙芝居の読み方
（3）人形劇の演じ方
（4）省察的実践家をめざす
（5）子どもの表現活動につなげる
（6）言葉で振りかえる
（7）書き言葉の環境と遊び
作品紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53

１．保育内容「言葉」

幼稚園や保育所における教育・保育は、意図的な営みである。養護的な関わりのもとに、教育が行われる。幼稚園や保育園で行われる保育の内容を、乳幼児の発達の諸側面から領域に分けて示している。乳幼児教育において育みたい資質・能力を各領域の「ねらい」としてある。現在では、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の五つの領域としてまとめられている。

ここでは領域「言葉」を中心に、保育内容と指導法ならびに教材研究について考える。領域「言葉」は言葉の獲得に関する領域として示されている。各領域との関連を踏まえながら、総合的な保育実践の指導について考える。

このテキストは、理論と実践そして省察と改善のサイクルにより、段階的に保育実践の指導力を身につけられるように考えている。保育の場では、省察しながら実践力を身につける取り組みが日々行われている。養成課程において、身につけておきたい力である。

(1) 領域「言葉」がめざすもの

人は、誕生してから周りの人とコミュニケーションを図りながら生きている。非言語コミュニケーション中心の時期を経て、言葉を獲得する。心地良い環境のもと、周りの人が話しながら関わる様子から、言葉を理解して発語する。やがて、生活に必要な言葉を覚え、感じたことを伝えようとして言葉による意思伝達をする。人が人と関わり、文化的な生活を行う上で、言葉の獲得は欠くことのできないものである。そこで、言葉を覚え始める乳幼児期の教育（保育）のあり方は重要なものとなる。

まずは、領域「言葉」がめざすものを確認しておこう。3 歳以上児の内容は幼稚園教育要領と保育所保育指針で相違はない、3 歳未満児からの育ちの連続性で捉えておきたいため、保育所保育指針をもちいる。そのため、保育士等と表現してあるが、幼稚園では先生、認定こども園では保育教諭と置き換えて理解すること。

1）乳児保育に関わるねらい

（ア）健やかに伸び伸びと育つ

健康な心と身体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力の基礎を培う。

（イ）身近な人と気持ちが通じ合う

受容的・応答的な関わりの下で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基礎を培う。

（ウ）身近なものと関わり感性が育つ

身近なものと関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基礎を培う。

平成 29 年度改訂保育所保育指針では、乳児保育に関わるねらいを「3 つの視点」で示している。未分化な乳児を捉えるための 3 つの視点を示して保育内容を考え、1 歳以降の育ちにつなげるようにしているのである。そこで、5 領域が重なり合うように位置づいていると捉えて設定されている。

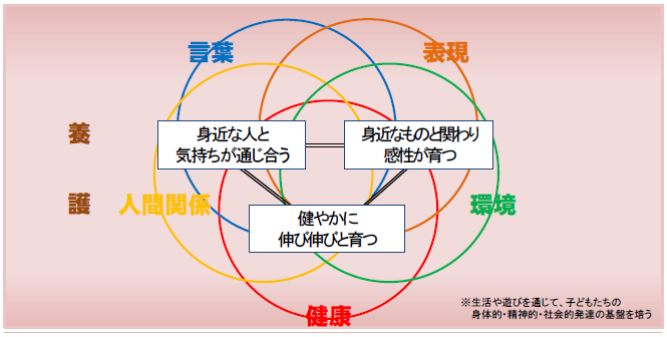


図１　０歳児の保育内容の記載のイメージ　厚生労働省（2017）

言葉の領域に関連していると思われる「ねらい」や「内容」をみると、次のように示されている。

イ　身近な人と気持ちが通じ合う

【ねらい】　②体の動きや表情、発声等により、保育士等と気持ちを通わせようとする。

【内　容】　②体の動きや表情、発声、喃語等を優しく受け止めてもらい、保育士等とのやり取りを楽しむ。

④保育士等による語りかけや歌いかけ、発声や喃語等への応答を通じて、言葉の理解や発語の意欲が育つ。

ウ　身近なものと関わり感性が育つ

【ねらい】　①身近な回りのものに親しみ、様々なものに興味や関心をもつ。

【内　容】　①身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。

「身近な人と気持ちが通じ合う」の視点は、言葉の領域との関係が濃い。身近な人と気持ちを通じあわせたいと願う過程で、非言語コミュニケーションおよび言葉を介してやり取りを楽しみ、人と関わる力の基礎を培うことを期待している。

「身近なものと関わり感性が育つ」は物を介して驚きや喜び、不思議さや戸惑いといった感情の動き、事物理解や探究心、思考する前の物との出会いを保障すると示されている。

2）1歳以上児の保育に関わるねらい及び内容

1歳以上については、1歳以上3歳未満児と3歳以上児として保育の内容とねらいが示されている。育ちの連続性を意識するためにも並列して表記する。

表1　1歳以上3歳未満に関する保育のねらいと内容　3歳以上児に関する保育のねらいと内容一覧

	経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。	
	1歳以上3歳未満児の保育	3歳以上児の保育
ねらい	①言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる。	①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
	②人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする。	②人の言葉や話などを聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
	③絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。	③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。
	①保育士等の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする。	①保育士等や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。

内	②生活に必要な簡単な言葉に気付き、聞き分ける。	②したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
	③親しみをもって日常の挨拶に応じる。	③したいことしてほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
容	④絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。	④人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
	⑤保育士等とごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。	⑤生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
	⑥保育士等を仲立ちとして、生活や遊びの中で友達との言葉のやり取りを楽しむ。	⑥親しみをもって日常の挨拶をする。
	⑦保育士等や友達言葉や話に興味や関心をもって、聞いたり、話したりする。	⑦生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
		⑧いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
		⑨絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
		⑩日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

①1 歳以上 3 歳未満児に関する保育

ねらいと内容を概観する。3 歳未満の子どもは、保育士等に依存して生活する場面が多いものである。その際、保育士等の応答的な関わりによって楽しさを味わい、言葉を使って人と関わる喜びが感じられるようにする。生活の中で繰り返し行われる事柄から、場面や行動と照らし合わせて言葉を理解し、聞き分けられるようになる。生活に必要な挨拶に関しては、保育士等が率先して行うことで心地良さや喜びが感じられるようにする。次第に自ら挨拶をすることを期待しながら、まずは応じることを身につけるようにする。遊び場面では、ごっこ遊びでの言葉のやり取りや言葉遊び、絵本や紙芝居といった児童文化財に触れ、それらの経験をもとに保育士等が適切に仲介しながら、友達と言葉によるやり取りが楽しめるようにする。

②3 歳以上児に関する保育

ねらいと内容を概観する。3 歳以上の子どもは、身の回りにいる保育士等や友達の話に、興味や関心をもって聞いたり話したりする経験を通して、体験した内容、欲求や感情を言葉で伝え、伝え合う喜びが感じられるようにする。さらに、質問するなどして人との関わりの中で物事を理解する体験ができるようにする。これは、探究心や思考力を培うことにつなげる意図がある。また生活場面では、必要な挨拶や言葉を理解して、社会的な生活を送り、楽しみながら場に応じて使えるようにする。遊び場面では、児童文化財に触れることにより、お話の世界を味わい、想像したり創作したりしてイメージを豊かにする。言葉の面白さや美しさなどに自ら気付くことを重視して言語能力が養えるようにする。社会生活での経験を通じて話し言葉だけではなく、書き言葉にも興味をもち、伝える楽しさを味わえるようにする。

ここでは、言葉に関する保育内容をみてきた。子どもの活動は、ひとつの領域だけではなく、いくつかの領域に関連しているものである。保育における領域は単独で考えるものではなく、各領域が関連し合っており総論として捉える必要がある。そこで、他の領域と関連させて指導について考えておく。

(2) 他の領域と関連させた総合的な指導

人間関係の内容に「自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く」という記載がある。相手に伝えるときに、多くの場合は言葉が用いられ言葉による伝え合いがされる。環境の内容の取扱いでは「身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い」とある。また、「他の子どもの考えなどに触れて新しい考えを生みだす喜びや楽しさを味わい」としてある。社会そのものが、人との関わりで営まれている。子ども社会も同様である。想像や思考する能力が向上していく過程において、言葉による伝え合いが大きな役割を果たしていることは言うまでもない。遊びを通した総合的な教育（保育）を基本としている幼児教育（保育）にあっては、領域を横断する考えのもとに、子どもの活動を考える必要がある。

平成 29 年改訂幼稚園教育要領・保育所保育指針の大きな特徴として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を 10 項目掲げ、育みたい資質・能力を示している。これも、領域を超えて子どもの姿として描いている。ここに示された幼児の姿は到

達目標ではなく、保育の方法を考える手立てとするためであるとしている。

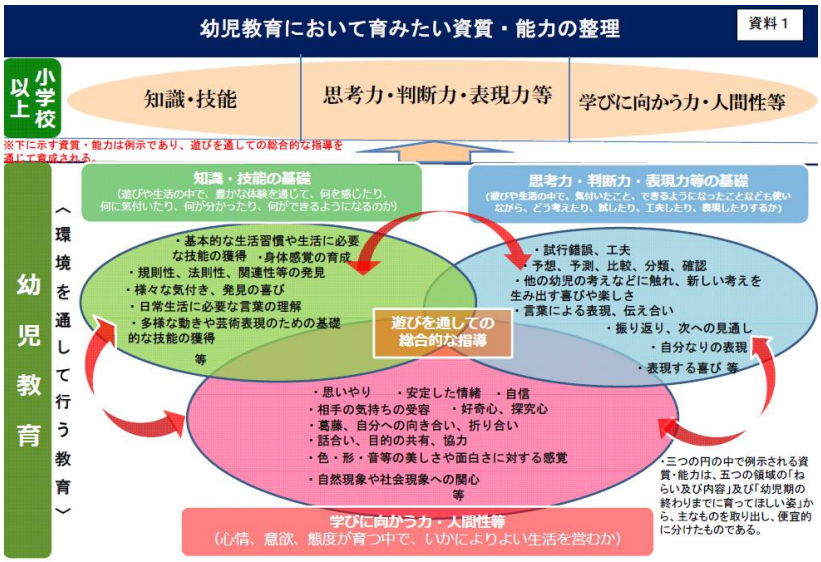


図２　幼児教育において育みたい資質・能力の整理　　文部科学省（2017）

図３　幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の整理イメージ　　文部科学省（2017）

言葉の領域に関連している項目と、具体的な実践内容を提示する。

表２　幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の整理イメージ

数量・図形、文字等への関心・感覚 **遊びや生活の中で、数量などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりして、必要感からこれらを活用することを通して、数量・図形、文字等への関心・感覚が一層高まるようになる。**
遊びや生活の中で自分たちに関係の深い数量、長短、広さや速さ、図形の特徴などに親しむ体験を重ね、必要感から数えたり、比べたり、組み合わせたりすることを通して、数量・図形等への関心・感覚が高まるようになる。
遊びや生活の中で標識や文字が人と人をつなぐ役割を持つことに気付き、読んだり、書いたり、使ったりすることを通して、文字等への関心・感覚が高まるようになる。

言葉による伝え合い **言葉を通して先生や友達と心を通わせ、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けるとともに、思い巡らしたりしたことなどを言葉で表現することを通して、言葉による表現を楽しむようになる。**
相手の話の内容を注意して聞いて分かったり、自分の思いや考えなどを伝える相手や状況に応じて分かるように話したり、話し合ったりするなどして、考えをまとめ深めるようになり、言葉を通して先生や友達と心を通わせるようになる。
イメージや思い巡らしたりしたことなどを言葉で表現することを通して、遊びや生活の中で文字などが果たす意味や役割、必要性が分かり、必要に応じて具体的な物と対応させて、文字を読んだり、書いたりするようになる。
絵本や物語などに親しみ、自分の未知の世界に出会うなどしながら興味を持って聞き、思い巡らすなどの楽しさに浸ることを通して、その言葉の持つ音の美しさや意味の面白さなどを友達と共有し、必要に応じて言葉による表現を楽しむようになる。
幼稚園生活を展開する中で、新たな環境との出会いを通して、幼児の持っている言葉が膨らんだり、未知の言葉と出会ったりする中で、新しい言葉や表現に関心が高まり、それらの獲得に楽しさを感じるようになる。

文部科学省（2017）

小学校教育の先取りではなく、小学校以降の教育を見据えて、幼児教育（保育）を考えていくことが円滑な接続につながり、子どもの育ちを支えることになると理解しておく。

２．保育内容「言葉」の指導法

（1）生活場面での総合的な指導

子どもの意欲を高めるためには、子どもにとっての必要性と楽しさを味わう経験となることが重要である。生活場面では、挨拶を交わすことがあがっていた。保育者が率先して挨拶をすることを繰り返し、その交流に楽しさが感じられるようになった先に、子ども自身が挨拶をしたくなるような環境づくりをする。

生活する上で、欲求や感情などを伝える必要がある。その際に必要な言葉を生活経験の中から身につけられるようにする。子どもの欲求を察した時でも、先取りす

ることなく子ども自身が言葉で伝える楽しさや喜び感じられるようにする。その積み重ねにより言葉を獲得していく。

仲間集団と心地良い関係を築いていこうとする時には、相手を思いやる気持ちや助け合う喜びを育みたい。思いやるようになる前には、他者の思いを知り気づけるようになることである。共に生活するなかで、他者に目を向けさせるような援助を行う。

（2）遊び場面での総合的な指導

遊び場面では、話をすることや話を聞くことといった立場が明確な場合もあれば、伝え合う、話し合うというように、立場を交代しながら関わっていくこともある。後者の方が、発達過程としては年齢が高い場合が多い。遊びに関しても思いを伝え合いながら、思いがぶつかったら話し合って遊ぶことができるような力を着けていく。ここでは、児童文化財を活用して言葉やお話の面白さを知り、イメージを豊かにするための保育実践について考える。

（3）児童文化財

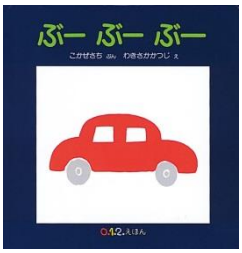
幼児教育（保育）における児童文化財の主なものには、絵本、紙芝居、人形劇などがある。具体的に実物を示して理解しよう。

1）絵本

絵本は、子どもが初めに出会う児童文化財であるといって良いであろう。子どもの発達に応じて、絵本を楽しませたい。しかし、子どもの興味・関心に沿ったものにすることが基本である。

①0 歳児

0 歳児では、子どもがページをめくっても破れない型紙を使用したものや、絵そのものを楽しめるものを準備したい。快い大人との関わりを通して、10 か月頃から模倣をはじめるようになる。大人が繰り返し行う動作、例えば手を振りながらバイバイという行為に興味を持ち、模倣する。日常の生活で身近にあるものや言葉の面白さを取り上げているものが子どもの育ちにつながる。



「ぶーぶーぶー」こがせさち
福音館書店

②1 歳児

1 歳児には、生活や遊び場面での行為、例えば食事や着脱といったことや、身の

回りにあるものをテーマにし、語りかけてもらって心地良い内容の絵本を準備したい。

おつきさまこんばんは	きゅっきゅっきゅつ	がたんごとん がたんごとん	いないいあいばあ	だるまさんが
林明子	林明子	安西水丸	まつたにみよこ	かがくいひろし
福音館書店	福音館書店	福音館書店	童心社	ブロンズ新社

③2 歳児

2 歳児には、友だちに関心が向き、同じことをして喜んだり、一緒に遊ぶ楽しさを味わったりする。基本的生活習慣を身につける時期でもあることに配慮した絵本も考えたい。つもり遊びを盛んにするようになるため、保護者がしているお料理などの絵本を好むようになる。

もこもこもこ	おんなじおんなじ	おにぎり	どうすればいいのかな	しろくまちゃんのほっとけーき
谷川俊太郎	多田ヒロシ	平山英三	渡辺茂男	わかやまけん
文研出版	こぐま社	福音館書店	福音館書店	こぐま社

④3 歳児

3 歳児になると、繰り返しがあり簡単で楽しいストーリーの絵本に触れ、イメージをふくらませるようになる。ワクワク、ドキドキするようなお話の世界を楽しませたい。

おおきなかぶ	はらぺこあおむし	ぐりとぐら	ぞうくんのさんぽ	三びきのこぶた
内田理沙子	エリック・カール	中川季枝子	なかのひろたか	瀬田貞二
福音館書店	偕成社	福音館書店	福音館書店	福音館書店

⑤4 歳児

これまでの経験から、ある程度の長さのあるお話が楽しめるようになってくる。お話を聞きながら、イメージをふくらませて疑似体験できるようなものにふれさせたい。

三びきのやぎの	からすのパンやさん	はじめてのおつかい	めっきらもっきら	どおんどん
瀬田貞二訳	かごさとし	筒井頼子	長谷川摂子	
福音館書店	偕成社	福音館書店	福音館書店	

⑥5 歳児

5 歳になると理論的にものごとを捉えるようになってくる。登場人物の立場になって感情移入したり、お話について語ったりできるような作品にも出会わせたい。5 歳児後半になると、物語をたのしめるようになってくる。「エルマーのぼうけん」などは、そのような時期に楽しませたい作品である。

すてきな三にんぐみ	スイミー	手ぶくろを買いに	おふろだいすき	エルマーのぼうけん
トミー・アンゲラ	レオ・レオニー	新美南吉	松岡享子　林明子	ルース・スタイルス・ガネット
偕成社	好学社	偕成社	福音館書店	福音館書店

2）紙芝居

お話が楽しめるようになったら、子どもの興味にそって取り入れる。2～3 歳向けとして 8 場面の作品も数多く出版されている。「大きなぼうし」は繰り返しがある 8 場面の作品である。「ごきげんのわるいコックさん」は子ども参加型の作品で幼稚園や保育所や親しまれている。昔話や、自然をテーマにしたものなど分野が表示されている。“仕かけ”がされている作品もある。

おおきなぼうし	ごきげんのわるいコックさん	ももたろう
木曽秀夫	まつたにのりこ	まつたにみよこ
教育画劇	童心社	童心社

3）人形劇

人形劇といっても、ペープサートやパネルシアターなど、その種類は数多くある。子どもたちが絵本などで楽しむお話を題材としたもの、子どもたちが歌う歌を題材とし、歌いながら演じ視覚的にも楽しめるようにするものもある。園生活をする上でのきまりごとや、身につけることが望まれる心情や態度などについてお話をする時に用いるものもある。遊びの面白さを味わい、楽しみながら決まりを体験的に知っていくことを基本にして行われる保育場面の中で、用いられる機会が多い。

①ペープサート

担任が作成したペープサートを視覚教材としてお話をしたり、物語を演じたりと様々に活用されている。左の写真は、その作品である。画用紙に絵を描き、割り箸を貼り付けて枝にする。割り箸部分を持って、子どもたちに示しながらお話や物語を演じる。

歌　「ひとりのぞうさん」

芦原真由美さん作品

②紙皿シアター

紙皿がシアターになるということに驚く人もいるでしょう。絵を描いたり貼ったりが容易にでき、同一の形が準備できるという特性を生かしている。紙皿の中心に向けて切り込みを入れて回転させることで、場面を展開したり別のものを提示したりする。子どもにはマジックのような驚きと面白さが味わえるシアターである。

「いただきます」

高司千晶さん作品

③牛乳パックシアター

幼稚園や保育所では、制作活動などで身辺材を用いることが盛んに行われている。これは空になった牛乳パックを活用したシアターである。箱として利用するもの、切ってカードとして使用するものなど、用途と効果を考えながら制作されている。

「ぴょんぴょんガエルに大変身！」

高司千晶さん作品

④軍手人形・手袋シアター

幼い頃に手袋を結んだりひっくり返したりして人形を作った経験があるひともいるのではないだろうか。最近は、作業用の軍手ではなく、手袋として使用する目的でカラフルな軍手が販売されている。カラー軍手を加工して人形を作り、手にはめて演じるものである。手の動きによって感情を表現することが可能である。

「わらべうたあそび」

舩本有紀美さん作品

⑥エプロンシアター

名前の通り、料理などをする時に着用するエプロンを舞台にして、フェルトなどで作った人形をマジックテープで貼ったりはがしたりして演じるシアターである。

表や裏のポケットに人形を入れておいて登場させる。別の場面の布を貼り付けて場面転換をするなど、工夫しながらエプロン上でお話をすすめる。

「はらぺこあおむし」

世羅亜弥さん作品

⑤パネルシアター

パネルに布を貼って舞台にして、P ペーパーに絵を描いたものをパネルに貼ったり外したりして演じる。歌に合わせて行ったり、お話を語りながら行ったり様々な取り入れ方がある。子どもが好んで聞きたがるお話のシアターを作成して演じることもある。写真は、その絵本とパネルシアターである。

「ゆっくりのはなし」

粕井友佳理さん作品

次の写真は、歌に合わせたパネルシアターである。クリスマスに向けて歌われる「赤鼻のトナカイ」をモチーフにしている。（石川朋弥さん作品）

３．教材の研究

教材研究は教育（保育）の基本である。教材を研究するにあたって、2 段階で取り組むようにすると、教材理解と実践力向上につながるであろう。

（1）教材研究カードの作成

児童文化財を活用する場合は、教材研究カードを作成する。例えば、次のような形式のカードもしくはシートを作成する。実習の前に、出来るだけ多くの教材に触れ、研究的視点で分析するようにしたい。

次ページに教材研究カードのモデルを示した。在学時代から取り組みを始め、勤務しはじめてからは簡単な記載になっても作成を積み重ねて欲しい。実習の指導案作成時に使用するだけでなく、保育者となってからも活用できると保育の幅が広がる。

教材研究カード

年　　月　　日（　）　　種別（絵本・紙芝居・物語・その他　　）
題名（　　）作者（　　）
出版社（　　）発行年（　　）対象年齢（　　）
あらすじ・内容
作者の意図（面白さ・ねがい）
活用できそうな場面・行事
予想される子どもの様子
同名の作品
作者（　　）出版社（　　）発行年（　　）
特徴（独自性・比較）

あらすじをまとめた上で、作者の意図を考えようとすると、作品を読みとろうとするので教材理解が深まる。

活用できそうな場面や行事を想定しておくと、指導計画を作成する際に盛り込みやすくなり、保育に取り入れる作品の幅が広がる。

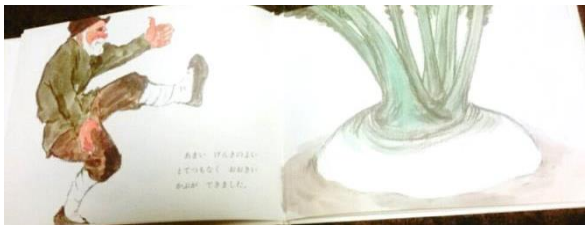
教材研究は、保育するために行うものである。作品を分析したら、子どもに提供した時の様子を考えてみる。対象する子どもが限定されていなくても、考えることが大切である。実習などの経験を重ねると、この欄がどのように変化するか自身で確認してみる。

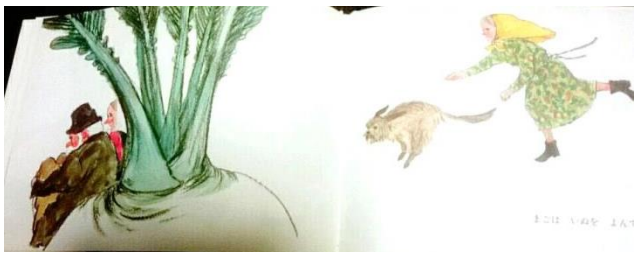
同名の作品欄を設けたのは、自分自身がより良いと思う作品に巡り合うアンテナをはって欲しいと思うからである。自分が知っている作品に親しみをもっており、他の作品に目を向けにくい。ひとつの作品が、何人もの作者によって出版されている事実を知り、内容を確認したい。

（2）教材の工夫

1)絵本

絵本を子どもの視点でみたり、作者の意図を考えたりすると面白い発見や気付きがある。前述した「おおきなかぶ」であるが、小学校の国語の教科書にも取り上げられており、お話を知る人は多いのではないだろうか。それでは、「大きなかぶができた時に、おじいさんはどんな気持ちだったのだろうか」とたずねられたら、あなたなら答えられるだろうか。写真のとおりである。親指を立てて喜びを表現しているのである。では、「かぶが抜けない時のおじさんやおばあさんの様子がどうだったでしょうか。とてもしょんぼりして見えます。実は、これらの事例は筆者の体験で、子どもの「つぶやき」や「発言」により注目して初めて気づいたのである。言葉、挿絵に語りが加わって楽しむ絵本は、実は非常に面白いものなのである。作者の工夫として、読み始める前は表紙を、読み終わった時には表紙と裏表紙を開いて見せるようにすると、抜く前と抜いた後が視覚的に楽しめるように作られていることに気付く。優れた絵本は味わい深い要素が盛り込まれている。あなたも、教材の工夫点をみつけてみよう。





2）ペープサート

ペープサートは、面の使い方や切り方、画材や台紙、枝の使い方によって作品の見せ方や効果に違いを出すことができる。

①切り方

四角や楕円、丸など形によって印象が違うため、周りの形をどのようにするかによって変化をつけることができる。また、描いているものの輪郭に沿って切ることで、その物の形や大きさを印象づけることもできる。

②面の使い方

片面だけを使用しても良いが、もう一方の面に違う絵だったり、関連する絵を描いたりすることで、登場人物を素早く変えたり、表情が変化したことを伝えたりすることができる。

③画材と台紙

台紙は白画用紙や色画用紙などから選択する。画材も絵の具、クレヨン、マジック、色鉛筆など使用するもので雰囲気が違ってくるため吟味したい。しかし、色鉛筆の場合は淡い色合いとなるため、マジックなどで縁どりをすると良い。描くだけではなく、色紙や色画用紙を形に切って貼り合わせて作る方法も用いられている。

④枝

多くの場合、割り箸を用いて制作する。保育者が握りやすく入手が簡単であるということも理由の一つであろう。ひっくり返したり、回転させたりする場合には筒状のストローなどが効果的なこともある。枝の素材を工夫することで演じ方や見え方が変わってくることを理解しておこう。

歌　「赤鼻のトナカイ」芦原真由美さん作品

こどものうた「春」にあわせて

石川朋弥さん作品

この作品は、歌詞の内容に合わせて表情の違う絵を両面に描くことで、楽しみながら歌の内容を理解し、歌う喜びを感じられるようにしている。枝は広告を丸めたものを使用している。身辺材を活用した例である。

3）軍手人形・手袋シアター

軍手人形も、歌にあわせて作られているものと、お話の内容にそって作られてい

るものがある。写真は、「手をたたきましょう」の歌に合わせて作っている。「笑いましょう」「おこりましょう」「泣きましょう」の歌詞に添ってつけかえる。歌を歌うだけよりも、感情移入しやすい。

歌「てをたたきましょう」

髙司　千晶さん作品

下の写真は「おはなしゆびさん」の歌にあわせて作られた軍手人形である。今にも口ずさみたくなる作品になっている。

歌「おはなしゆびさん」舩本有紀美さん作品

次の写真は、「子ブタが道を歩いていたら」のお話の手袋シアターである。手の大きさであるため、園全体の集いなどの規模では見えにくく向かないが、クラス規模であれば、楽しむことができる。少し時間がとれれば、手袋をはめたら「お話のはじまり　はじ

「子ブタが道を歩いていたら」粕井友佳里さん作品

まり～」となる。

4）エプロンシアター

エプロンシアターはエプロン上でお話を展開するため、場面の転換に工夫がされている。写真は中谷真弓考案の「おおかみと七ひきのこやぎ」のエプロンシアターである。家の部分を、玄関と室内とで二重につくり、マジックテープを外すことで玄関から室内に場面を転換させるようにしている。

また、最後の場面でオオカミが池に落ちるお話になっている。その池は、ポケットを活用して、池に落ちる場面を表現するようにしている。このようにして、いくつもの場面からなるお話の展開を、一枚のエプロンで演じるのである。

中谷真弓　「おおかみと七ひきのこやぎ」メイト

5）パネルシアター

①パネルの種類

パネルシアターは、写真のような台に設置して行う。幼稚園や保育所では、行事の際に会がもたれることがある。数十人が集まる会などの時には、約１m四方の大きさのものを使用することが多い。クラス単位で演じる際にはスケッチブック程度の大きさのもので行うこともある。日常生活の流れの中で、容易に準備したり片づけたりできるため活用しやすい。設置することもあるが、紙芝居のように片手でパネルをもって行うこともある。また、ブラックシアターという黒いパネルを用いて行う。Ｐペーパーに絵を描く際に蛍光塗料を使う。保育室内を暗くしてブラックラ

イトをあてると浮かび上がるという仕かけである。七夕やクリスマスなど夜の場面がでてくるお話などに効果的である。次の写真は、七夕の由来を伝えるお話と「クリスマス」のお話をブラックシアターで作ったものである。保育室内も暗くするため、非日常的な感覚とともに、臨場感を味わいながらお話が伝わっていく。

「七夕」

髙司千晶さん作品

歌

「うさぎ野原のクリスマス」

芦原真由美さん作品

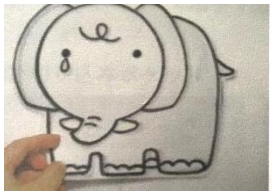
②仕かけ

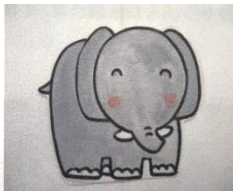
パネルシアターには、動きや変化を表現する数々の仕かけが施されている。ここでは、土居希さんの卒業論文で、パネルシアターの仕かけについて述べる際に用いた写真を資料にして説明する。

《裏表貼り合わせ》

表と裏に絵を貼り合わせたものである。

場面転換や表情の変化などをねらう場合に用いるとよい。前出の赤鼻のトナカイのパネルシアターも同様の仕かけがされている。

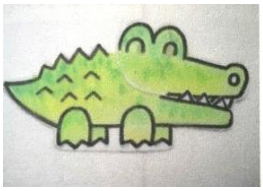


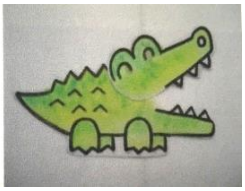


《糸止め》

糸を通して玉止めすることで、一部分を動かすようにすることができる。

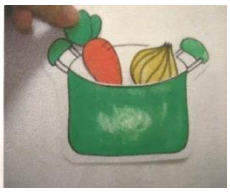
写真のように口を可動にしたり、手足を可動にしたりして動きのある作品にすることができる。





《切り込みポケット》

物を出し入れしたい部分に切り込みを入れておき、話のなかで出したり入れたりする。裏を付けるとポケット機能になる。

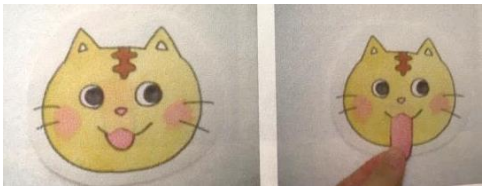


《裏打ち》

裏にパネル布を貼って、二枚を重ねておく仕かけである。後ろから絵を出したり、お話しながら重ねたりすることもできる。

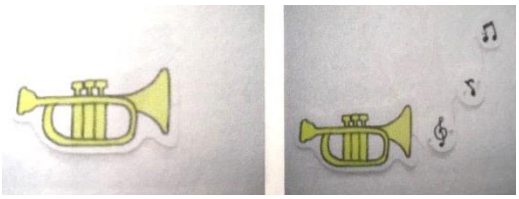
《引き抜き》

切り込みを入れて、差し込んでおいたものを引き抜く仕かけである。



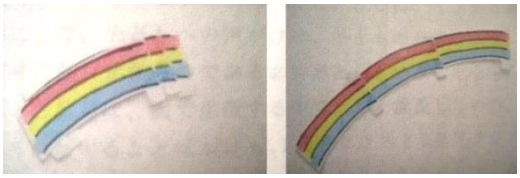
《引っ張り》

絵を糸でつないで裏に隠しておき、引っ張ることで次々と出てくる仕かけである。



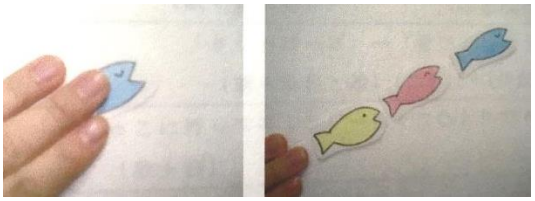
《引きのばし》

絵を重ねておいて引きのばし、長くなったり高くなったりする変化をつけることができる。



《スライド》

同じ形のものを重ねて持っておき、ずらしながらパネルに貼る。数が増える面白さが表現できる。



6）素話

絵本や紙芝居などでお話の面白さを味わい、イメージする力が育ってくると素話を楽しむことができるようになる。素話とは、語りのみでお話を伝えるのである。子どもたちをお話の世界に引き込み、その楽しさが伝わるようにする。保育者にはその技術と力量が求められる。

まずは、原作を大切にしながらお話の面白さが伝わるようにまとめる。まとめたものを覚え、表現のしかたを考えて練習する。絵本の読み聞かせやシアターを演じ

ることで身に着けた技術を発揮して練習を重ねることである。

４．教材の開発

絵本もシアターも、市販されているものがあるが、子どもの実態や様子に応じて教材を考えたり、作ったりする力も必要になってくる。これまでの学びを踏まえて、自分自身でも教材を考えたり作ったりしてみよう。

(1) 絵本をつくろう

絵本は市販されているものを購入して読み聞かせるものと思ってはいないだろうか。保育所や幼稚園でも、手づくり絵本の取り組みがされている。しかし、保育や行事の準備、書類作成の間をぬってということなる。時間確保に工夫を要する。そこで、養成課程で学んでいる時期に制作に取り組み、その面白さと難しさを体験して欲しい。

①布絵本

絵本のなかでも布絵本は、比較的年齢の低い子ども向けに作られているが、数は多くない。また、子どもの興味や関心、発達によって手づくりのものを制作することもある。次の写真は、触りながらつけたり外したりをして遊んだり、お話を作ったりする乳児向けの学生作品である。

次の写真は布絵本で、乳児向けに生活のことを取り上げている。チャックを口に活用して、食べさせることで手指の発達を促している。また、ボタンを留め外しすることで起きたり寝たりする仕かけになっている。これも、基本的生活習慣自立に向けて、着脱時のボタンの留め外しをすることを、遊びを通して身につけるねらいをもっている。

次の写真は、布絵本の学生作品である。
動物や女の子に、食べ物を食べさせてあげるような仕かけになっている。いくつかの絵本を参考にしながら、子どもが好きな動物やその動物が好む食材が理解しやすいものを選んで制作している。

乳児では、この他にも感触遊びを楽しめるような布絵本なども効果的である。次は、生活場面の再現遊びができる布絵本である。
牛乳や泡立て器などは取り外しができるようになっている。ホットケーキも裏面

にすると焼き色がつくように工夫されている。

　貼ったりはがしたりしながら、身近な物や色々な形を認識していくような布絵本もある。

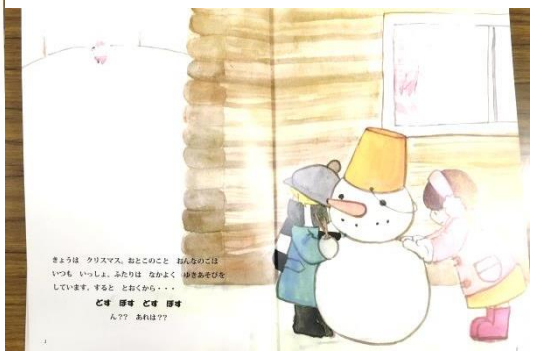
②絵本

紙素材に描いて作る絵本をみてみよう。お話を考えて、画用紙や厚紙などに描いて作る。授業での学びをもとに探究して、卒業研究に発展させた作品が次の写真である。

卒業制作　絵本「なかよしむらのどうぶつたち」

初等教育学科　23 期生　幼児教育コース図工ゼミ　安部真未

この絵本は、自身が幼少期に母親から話して聞かせてもらった話を思い起こし、絵本にまとめたものである。



卒業制作　絵本「プレゼント」

初等教育学科　27 期生　幼児教育コース図工ゼミ　沖田悠希

この絵本は、友人が語ってくれた夢をもとにしてお話を作り、絵本にしたものである。

次の絵本は、年中児が運動会で忍者になって修行をするという競技の導入や意識づけとして用いられたものである。担任保育者の作成によるものである。担任の願いが込められ、運動会の競技に挑戦しようという気持ちを引きだす内容になっている。

にんじゃがっこう
めんきょ
かいでんへの
みち

たくましい うで
たくましい あし
たくましい こころ

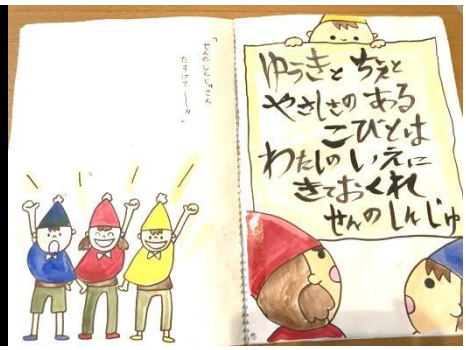
うんどうかいに
むけて
しゅぎょうに
はげむべし!!
がんばーる
うんどうかい
ぶんしんのじゅつ
ハッ!!
にんぽう えぐざいるまわり

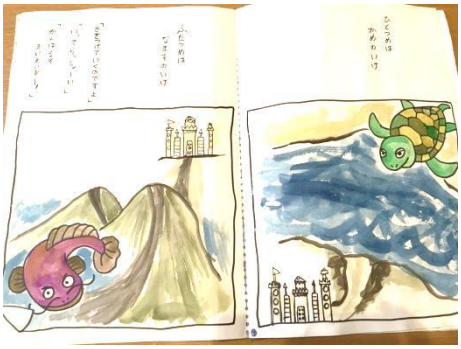
「にんじゃがっこう　めんきょかいでんへのみち」

芦原真由美さん作品

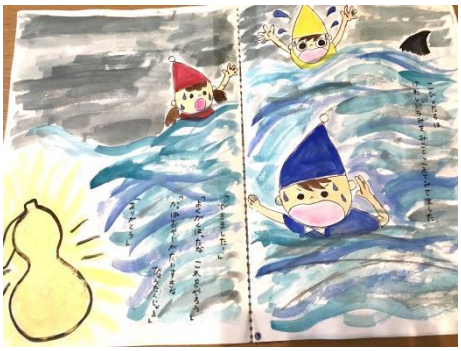
③子どもと絵本をつくろう

絵本は、保育者が制作して子どもに提供するものだけではないのである。保育の中で、子どもと一緒に制作することもある。実際に子どもたちと制作した絵本を紹介しよう。この絵本は、年長児がお話を作り、そのお話をもとに担任保育者が絵を描いて絵本として仕上げたものである。これまでの読み聞かせなどの経験をもとにして、お話を構成する力が養われる取り組みである。リアリティーを求める年長児にとって、形となった完成物を見ることは、達成感を味わうものであり今後に向けた意欲につながるものである。

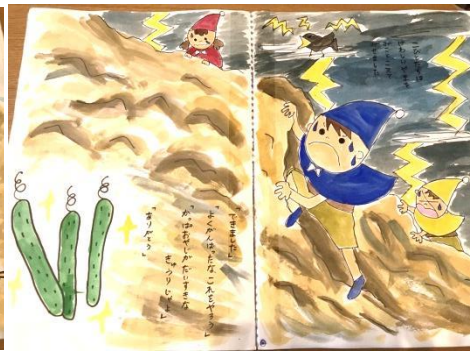

ゆうきとちえと
やさしさのある
こびとは
わたしのいえに
きておくれ
せんのしんじゅ



「おぬしたち
よくもこの
こわいうみを
こえてきおった」


こんにちは
わたしはみずのかみです。
「ひきました！」
よくがんばったな
がんばりたいきな
「ありがとう」

「おぬしたち よくきたな
このはあしいやきを
こえてみせよ」


こんにちは
わたしはやまです。
「できました！」
よくがんばったなこえをやるよ
がんばりたいきな
「ありがとう」
もっとりょくを

「やっぱりかぼちゃは
アッチのたんぼにもっていこう
だから
まかしま
かまってください」
「ぎゃっ！！！
どうぼ…」

そしてかぼちゃ
かぼちゃをかぎりつづけて
おかあさん
たきあ
しまったら
げっきたたら
おもってもも。
かこがら
おかあさ
かぼちゃのほうをまきして
ここのたんぼは三まいしまった。
すると、とうとう
かぼちゃのきもちがこんが
げっきこのたんぼのかぼちゃ金金だった。

（2）人形劇をつくろう

1）ペープサート

ペープサートの特徴を活かしながら、工夫を凝らした作品で保育している実践例である。

「十二支のお話」　髙司千晶さん作品

巻物に絵を描き、部分的にペープサートを用いてお話をすすめるのである。絵本とも、紙芝居とも違った提示のしかたに面白さを味わうことができる。

この他にも、屏風上に制作して、広げることで絵を楽しませるものや、回転させることで動きがあるように見せるものなど、工夫を凝らした作品がある。

次の作品は「いろいろおんせん」というお話である。ペープサートの要素と紙芝居の要素を取り込んだものになっている。

「いろいろおんせん」

芦原真由美さん作品

食育に使われている例も多い。子どもたちに問いかけながら、食への感謝を伝える教材にしている。

食育ペープサート

粕井友佳里さん作品

この作品を用いて、子どもたちに何を伝えようとしているのでしょうか（ねらい）。どのようにおはなしをするのでしょうか。考えてみましょう。

ねらい   お話

ペープサートはアレンジされて、様々な保育場面で活用されている。

2）軍手人形・手袋シアター

手袋シアターで、両面を使うという工夫をしているものもある。調理過程と配膳場面を表現した作品である。

「カレーライス」

船本有紀美さん作品

「お寿司」

船本有紀美さん作品

簡単な動きであるため、保育者が演じた後で、子どもたちもすることができるものである。ぜひ、子ども用も用意しておきたい。

左の写真を見て、何のお話か分かるだろうか。子どもたちが大好きな「三びきのこぶた」の手袋シアターである。手の平の部分を家にしてある。こぶたが建てる、わら・木・レンガの家をはめかえながらお話をすすめるのである。これも、手袋シアターならではの作りである。

手袋は、加工しやすく自由に手指を動かせるため、工夫のしかたひとつで活用の幅が広がる。柔軟に考えながら、オリジナル作品にチャレンジしてみよう。

「三びきのこぶた」　船本有紀美さん作品

2）エプロンシアター

「おおきなかぶ」のお話は、中谷真弓さん考案のエプロンシアターとして作成されている。おおきなかぶを表現し、抜けた喜びが感じられるように、車の日よけシートの原理を使って、土の中に埋まっている時はコンパクトに収納しておき、抜けた途端に大きく広がる仕かけになっている。

中谷真弓「おおきなかぶ」メイト

お話をもとに作成されているため、シアター制作の工夫はいく通りもある。次の写真は、学生の作品である。連なって抜いている様子が伝わりやすいようにし、人との大きさの比較により、かぶが大きいことを印象づけるように工夫したとのことである。それぞれの良さや味わいを理解し、学生の皆さんには教材研究の意識を高くもつことを期待する。

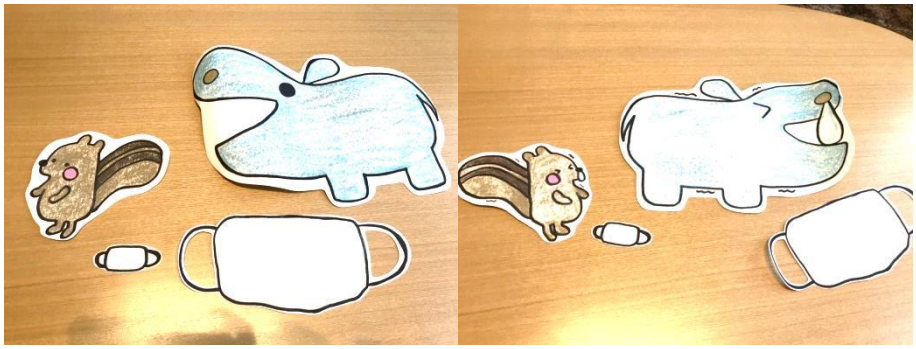
「おおきなかぶ」黒井勝観さん作品

3）パネルシアター

ここでは、パネルシアターを種類別に説明する。

①歌にあわせて

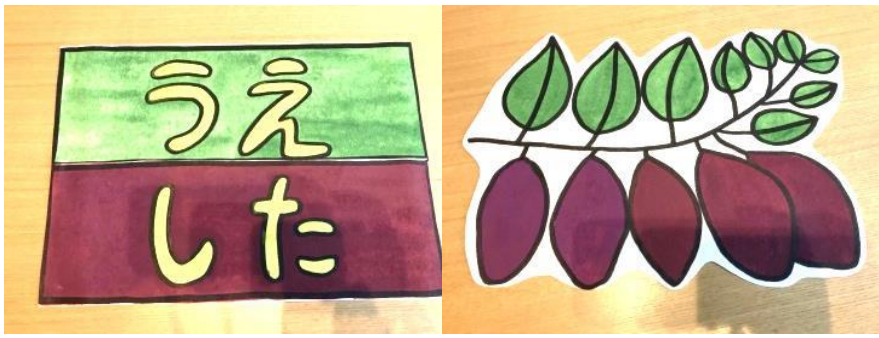
このパネルシアターは、歌にあわせて作られたものである。幼児教育を勉強している学生であれば、良く見ると聞きなれたフレーズを口ずさみたくなるのではないだろうか。「コンコンクシャン」の歌である。この作品は、裏表合わせの技法を使っている。



歌「コンコンクシャン」芦原真由美さん作品

②クイズ形式

パネルシアターでクイズ形式にして用いている作品もある。「どっちがいい」という作品である。さつまいもは、食育の取り組みの中で、栽培に関するお話をクイズ形式で進める時に用いているものである。



口が描かれているものは、６月４日の「虫歯予防デー」に向けてのお話に使われる作品である。応答的な進め方で、違いを見つけたり考えたりすることを可能にする。

「どっちがいい」芦原真由美さん作品

③歌とお話

保育者なら多くの方が知っているであろう「すてきな帽子屋さん」である。歌とお話で進める形式のものである。そのお話をもとに制作した作品である。

「すてきな帽子屋さん」　世羅　亜弥さん作品

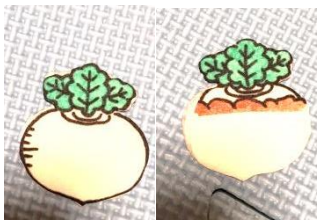
ピアノ伴奏者と息を合わせながら演じるのである。

④お話

このテキストでは、あえて同じ題材をとりあげて、色々な児童文化財で作られたものを提示している。それにより、それぞれの児童文化財の特徴を捉えてほしい。絵本、エプロンシアターでも挙げた「おおきなかぶ」である。

「おおきなかぶ」　　世羅　亜弥さん作品

お料理して食べるようにアレンジしてある。「ちいさなかぶ」がいくつもある。作者によると、お話を始める前に「ちいさなかぶ」を抜いて導入にしたり、パネルの周りに飾って背景として使ったりしているとのことである。「ちいさなかぶ」も下の写真のように、土に埋まっているものと収穫したものとを準備している。「ちいさなかぶ」の収穫から「おおきなかぶ」のお話に移行する時の子どもたちのワクワクした表情を浮かぶようである。



5）教材開発の要点

①子どもの実態把握

教材を考える時には、子どもの発達を含む実態把握が必須である。興味があるものや理解できる言葉はもちろんのこと、どの程度お話を聞くことができるのかなどを把握する。

②ねらいの設定

既存のお話を用いる場合は、教材研究カードで示した内容をもとに作者の意図を踏まえてねらいを考える。自身が伝えたいことであれば、何を伝えたいのか、子どもたちが何に気づき、どう感じて欲しいのかを明確にする。

③内容の検討

ねらいを基に内容を考える。大人の発想で一方的な話にならないように、子どもの揺れや考える選択肢などを伏線とするなどの工夫をする。

④絵や技法の検討

語りと絵でお話を伝えていくのであるから、どのような構図や絵にするかによって印象が違ってくる。また、技法によっても絵の味わいが変わってくるため、絵コンテや下書きをするなどして検討して決定する。

その際、演じ方も合わせて考えて演じ方による効果を含めて絵の描き方を決めるとよい。

５　指導法

（1）絵本の読み聞かせ

絵本は、読み聞かせをして子どもたちに楽しさを伝えていく。絵本の読み聞かせについて、保育者の実践を観察させて頂くなどして、次のワークシートに記入してみよう。

絵本の読み聞かせについて学ぼう

〈読み聞かせの魅力〉

〈環境構成〉

〈読み手の心構え〉

〈絵本の持ち方〉

〈読む順番〉

〈読み方と配慮〉

〈ページのめくり方と配慮〉

〈絵本の選び方〉

〈事前準備〉

①読み聞かせの魅力

読み聞かせの魅力は、何といっても、大人（保育者、保護者）が読んでくれる声を聞き、絵を見つめストーリーの展開に心を躍らせることにある。ページがめくられるまでの間に、ドキドキワクワクする感情が味わえることである。

面白いと思えるお話に出会った子どもは、何度で読んで欲しがり、記憶するほどである。この経験により、お話の面白さを味わい、遊びながら言葉を獲得することにつながるのである。

②環境構成

場の確保と環境は大切な要素である。子どもがゆったりと座れて、絵本に集中できる場所を選ぶ。視覚的な刺激が少なく、周りの様子に目が向きにくい場所を設定する。

保育者は、子ども全員に絵本が見える位置に座る。前の子どもの首が疲れないような高さで、後ろの子どもにも見える高さに絵本がくるように配慮する。例えは、乳児であれば、保育者は床に正座する。幼児が床に座った場合、保育者は子ども用の椅子に座る。幼児が椅子に座った場合は、大人用の椅子もしくは立って読み聞かせをする。

子どもが保育者に近づきすぎることも想定して保育者の後ろのスペースを確保するなどの配慮も欠かせない。

③読み手の心構え

学生が読み聞かせをすると、子どもに聞いてほしいという気持ちが先行して、聞きなさいという雰囲気をつくってしまう場合がある。保育者自身も「どんな本かな。楽しみだね。」というくらいの気持ちで臨みたい。その雰囲気は伝わるものである。そして、お話の楽しさ面白さ、不思議さを子どもに届けるつもりで読む姿勢をもちたいものである。お話を読んでいて、子どもたちが絵本の世界に入り込んだと感じたら、その読み聞かせは子どもに届いたといえる。学生としては、喜びを関いる瞬間になるであろう。

④絵本の持ち方

持ち方に決まりはないが、次のように考えるとよいであろう。子どもが見やすいこと、保育者がページをめくりながら子どもの様子にも目を向けられる楽な姿勢がとれるように考える。絵本を開いた中央を下から持つようにすると、安定し絵本が

揺れないであろう。持つ位置は、子どもに目配りをしやすい位置にでページがめくりやすい方向に持つとよい。絵本を注意深く見ると、右開きのもの、左開きのものがあることに気づくであろう。本の作りにあわせて持つとよい。

⑤読む順番

読む順番は、タイトル、作者名、画家名、とびら、本編へというのが基本である。場合によっては、作者や画家を省略することもある。裏表紙までで完結のものもあるので、裏表紙まで楽しめるように考えておくとよい。

⑥読み方と配慮

主役は絵本と聞き手である子どもだということを忘れないようにしたい。読み手が前面にでることがないように意識する。

注意点としては、後ろの人にも聞こえる声の大きさで読む。声が小さいと子どもの集中力が続かないことがある。自分自身の声を知り、よく通る声になるように練習しよう。通る声を身に着けておくと、小さな声で言うことが効果的な場面でも聞こえるものである。心を込めて、ゆっくり、はっきりと読むことを心がける。

お話を表現する際に、抑揚をつけることが大切になる。まずは一本調子にならないことである。抑揚をつけるには、話の流れをつかんで登場人物の気持ちになって、感情を込めて読むようにすると自然に表情豊かな声になってくる。

そして最も大切なことは、子どもの反応を確認しながら読むことである。子どもが絵本を楽しんでいるか、その表情や言動で確認しながら読み進めるようにする。

⑦ページのめくり方と配慮

スムーズにめくることが基本である。そのために、めくる準備しておくと良い。めくるタイミングとしては、読み終わったからではなく、子どもが絵を見ている様子を確認して、絵をたのしむ時間を確保してめくる。「間」を大切にしたいものである。話の内容によっては、スピーディーにめくることが効果的な場合もあるので状況に応じて考える。

⑧絵本の選び方

季節を問わないものは別であるが、季節感があるものは季節にあったものを選ぶ。クラスや子どもの状況に応じて、話題になっているものや興味を持っているものなどを選ぶ。また、行事に合わせて選ぶ場合もある。

個別に読む絵本よりも簡単なものを選ぶとよい。クラスの集中力や読み聞かせの

経験などを考慮して、お話の長さや難しさを決める。

⑨事前準備

必ず下読みをしておく。できれば覚えるくらい読み込んでおくとよい。その際は、子どもがいることを想定して練習してみるとよい。できれば誰かに見てもらっては気づきが聞けるようにするとよい。

⑩お話を始める雰囲気づくり

読み聞かせを始める時には、聞く態勢をつくることが大切である。落ち着いた雰囲気作りを心がけたい。集中するための方法も、いくつか考えておくとよい。これらの技術も、実習や保育ボランティアを通して身につけたいものである。

(2) 紙芝居の読み方

紙芝居は、手に持って読む場合もあるが、左の写真のような紙芝居舞台にセットして読む場合もある。舞台を使用すると、画面が際立って見えるため、集中しやすい。画面の抜き差しが容易で、保育者も読み進めることに注意を向けることができる。

読み方は、絵本の読み聞かせを参考にして、ページのめくり方を画面の抜き方に置き換えて考えるとよい。

(3) 人形劇の演じ方

人形劇を演じる時には、当然のことであるがお話を覚えておかなくてはならない。何かを見ながら行うことはない。まずは、記憶してスラスラと言葉が出るように準備しておく。演じるということが加わってくるため、記憶するということについては、入念に準備する。その際、内容を記憶しようとせず、動きをつけながら覚えるようにする。演じる時には、次の３点を考慮して演じる。

①登場人物の出し方・動かし方

登場人物の持ち方や出し方、動かし方も表現において大きな要素となる。登場人物のその時の感情に添って、悲しそうに、嬉しそうにという雰囲気が伝わるように

動かす。

②抑揚をつける

お話の部分とセリフ部分がある。セリフについてはもちろんのこと、お話の部分でも情景や雰囲気が伝わるように話す。全体を見た時に、お話の部分の情景描写の表現力よって、子どもの引き込まれ方は変わってくる。子どもの年齢が低ければ低いほど、保育者が感情を表現して伝える必要がある。学生が練習する場合は、感情を込めていると思っても、実は求められる表現の半分にも達していないものであることを認識しておく。

③応答性

人形劇は、応答的に話を進めていくことができる。子どもに問いかけながら、その答えを反映させてなど、その時の様子に応じて話を展開していくことができる。状況に応じた話の展開に面白さがあるのも人形劇の特徴である。この点を踏まえて子どもへの言葉かけや演じ方を考える。

大型のパネルシアターは固定の台があるが、小型のパネルシアターは移動が可能である。エプロンシアターは身につけており、手袋シアターやペープサートは手に持っているものである。移動するには何の問題もない。むしろ積極的に移動して、子どもの側に行くなど、お話に合わせて効果的な動きを取り入れる。

(4) 省察的実践家をめざす

保育実践をした後は、振り返りをする。その際は、自分自身の実践についての振りかえりと、子どもについての 2 つの視点から振りかえりをする。自身の保育実践については、演じ方や子どもの反応をもとに考える。子どもについては、ねらいとしていた内容にそって、楽しむ、感じるなどの「心情」、積極的に、自らなどの「意欲」、聞く、話す、尋ねる、してみるなどの「態度」について考える。そして、良かったことは継続し、子どもの育ちとして捉える。課題は改善を考えて次につなげる。

(5) 子どもの表現活動につなげる

お話の楽しさを味わった子どもたちは、自らも演じたいという気持ちを抱く。
子どもがお話を味わうことに丁寧に取り組み、表現活動へとつなげるようにしたい。

清水克之編著『保育学入門』　黒木晶子　上村加奈「第６章　子どもと言葉に」実践について記している。参考にして実践のしかたを考えよう。
また、音楽表現や身体表現に関する科目でも学修するので、それらの学びを関連させて保育実践を考えるとよい。

（6）言葉で振りかえる

保育の場面で、言葉で振りかえったりお話したりする場を設けて経験できるようにする。このような機会を設けて自分の経験や思いを言葉で伝えることで、語彙が増え、話し方を身につけることにつながる。

場の設定としては、保育者と１対１で、出来事をお話する。友だち数人にお話する。クラスの集まりの場でお話するなどが考えられる。段階的に場を設けながらお話する機会をつくる。

お話することを得意としない子どもには、焦らせることなく、出来栄えについての評価を加えず、話したことを認めるようにして時間をかけて取り組むようにする。

（7）書き言葉の環境と遊び

書き言葉については、まずは環境づくりをすることである。実践例には次のようなものがある。

①個人所有物に名前を書く（マークとしてのシールを徐々にやめて名前標記のみにする）
②掲示物や展示物の名前を表記する。
③お当番表を名前と絵で表記する。
④日付を書いておく
⑤歌の歌詞を書いて掲示する。

子どもたちは生活の中で、物には名前があり、文字を使って伝達することを知っていく。そのための環境を整えておく。文字を覚える時間をもつというより、生活の中で覚えていくということを考えたい。

環境からの刺激を受けることで、子どもが文字を書こうとする。絵に文字が混じるようになる。子どもたちが興味を示したら、遊びの中に文字を取り入れるように

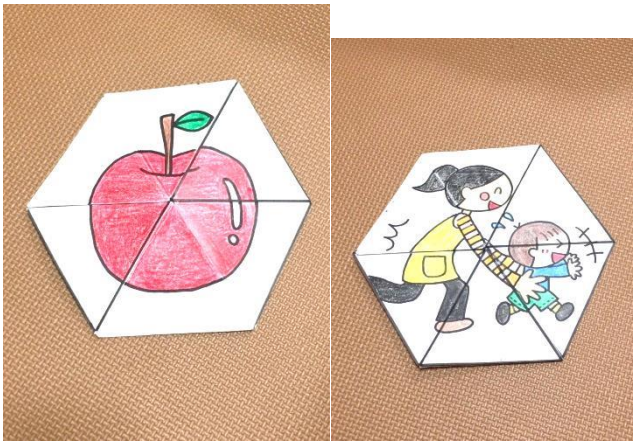
する。

　例えばレストランごっこにはメニューが必要になる。郵便屋さんごっこにはお手紙を準備することになる。このようにごっこ遊びなどを通して文字に関心を示しながら遊びを楽しむ経験が重ねられるようにする。

作品紹介

本テキスト作成にあたって、卒業生から実際に使っている作品を提供して頂いた。本文中ではその全てを紹介することができなかったので、個々で作品紹介として提示する。

六面体になっており、開くと中から絵が出て来てお話になる。



粕井友佳里さん作品

段ボールシアター「ひな祭りの由来」

粕井友佳理さん作品

ペープサート「ももたろう」

藤井翔子さん作品

パネルシアター「どうぶつえん」

芦原真由美さん作品

パネルシアター「まほうのそうがんきょう」

粕井友佳里さん作品

エプロンシアター「どうぞのいす」

鬼坊実香さん作品

参考文献・資料一覧

今井和子（1996）『子どもとことばの世界』　ミネルヴァ書房

乾　孝（1993）『絵本・劇・あそび　乳幼児の文学』　新読書社

梅本妙子（1995）『絵本と保育』　エイデル研究所

小田豊　芦田宏　門田理世（2003）『保育内容　言葉』　北大路書房

近藤幹生　寶川雅子　源証香　小谷宜路　瀧口優（2016）『ことばと保育』　ひとなる書房

厚生労働省（2017）『保育所保育指針』　フレーベル館

厚生労働省　「保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ」

田代康子（2007）『もっかい読んで！－絵本を面白がる子どもの心理』　ひとなる書房

土居　希（2010）『広島文教女子大学　人間科学部　初等教育学科　平成21年度卒業論文　ことばと音と絵～子どもの生活・成長に寄り添って～』

徳永真理（2002）『絵本で育つ子どものことば』　アリス館

乳児保育研究会（2015）『乳児の保育新時代』　ひとなる書房

福岡貞子　磯沢淳子（2009）『乳児の絵本・保育課題絵本ガイド』　ミネルヴァ書房

文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』　フレーベル館

文部科学省　「幼児教育部会による審議のとりまとめ」

保育内容「言葉」教材の研究と指導法

2018 年 2 月　初刊発行

編著者　上村　加奈
発行所　広島文教女子大学
〒731-0295
広島県広島市安佐北区可部東 1-2-1
TEL　082-814-3191